

## 8

膀胱陰瘻に対する修復手術の歴史と  
この領域における J. M. Sims の評価

竹内 薫

鳥取赤十字病院産婦人科

2019年7月3日付朝日新聞によれば、米国ニューヨーク市の公園に設置されていた産婦人科医 James Marion Sims (1813–1883, Sims と略) の銅像が、2018年4月に撤去されたそうである。その理由は、出産後の膀胱陰瘻の治療法を確立して米国医師会長も務めた Sims が、奴隷の黒人女性を対象とした無麻酔の人体実験によってその治療法を確立したことは問題であるとして、地区住民が市に像の撤去を要請した結果だという。

Sims は「Sims の姿勢」や医療器具にその名を残す高名な産婦人科医であり、有名な産婦人科手術書である TeLinde's Operative Gynecology にも詳しく紹介されている。そこで本書の記述を中心に文献資料を参照し、本テーマについて検討した。

《膀胱陰瘻は古代エジプトの時代から存在しており、紀元前 2050 年のヘンヘニット女王のミイラにも大きな瘻孔が発見されている。アラブ・ペルシア時代の医師 Avicenna (980–1037) は、難産から起こる膀胱陰瘻が女性の尿失禁の原因である可能性を指摘し、本症の治療は困難であることを最初に記述した。19 世紀の米国における Sims の業績 (Sims JM. On the treatment of vesico-vaginal fistulas. Am J Med Sci 23: 59, 1852.) が出るまでは、本症治療の成功は非常に限定的であった。オランダの Van Roonhuyse, フランスの de Lamelle もいくつかの成功例を報告している。米国人医師 J. T. Mettauer は、1838 年に最初に金属製の縫合糸を使用して膀胱陰瘻の閉鎖に成功し、1840 年に報告した。(Mettauer JT. Vesico-vaginal fistula. Boston Med Surg J 22: 154, 1840.) 彼は 1855 年に総計 27 例の治癒例を報告している。米国南部在住の Sims は、麻酔法や無菌法のなかった時代に膀胱陰瘻治療の試みを開始した。彼はもともと外科医として成功していたが、骨盤外科の経験は持っていなかった。友人の荘園主が、大きな膀胱陰瘻を有し日常生活に支障を来す状態の黒人奴隷の治療を Sims に依頼した。彼は最初その依頼を拒否していたが、最終的にはこの不運な女性を救いたいという熱情によって、この仕事に従事することとなった。彼は 1845 年から 1849 年にかけて、彼自身が費用を負担して患者の女性たちに住居と食事を提供した。一人の患者に対する 29 回目の手術で、彼は最終的に彼女の膀胱陰瘻を閉鎖することに成功した。彼は自分自身の成功は、今日 Sims の体位として知られる側臥位の採用、銀製ワイヤー縫合糸の使用、自身が考案した特殊な器具 (Sims 氏陰鏡) の使用の 3 項目のおかげであると考えた。ほとんど同じような銀製の器具は、プラハの von Metzler によって 1846 年に記述されていた。Sims の成功は広く知られるようになり、彼はニューヨークに婦人科専門病院を設立するとともに、各地で膀胱陰瘻のデモンストレーション手術を行った。すべての彼の手術は、無菌法や麻酔なしに行われた。クロロホルムを用いた産科全身麻酔 (James Simpson, 1847 年) やエーテル麻酔 (Crawford Long, 1842 年成功, 1849 年発表, William Morton, 1846 年成功, マサチューセッツ総合病院「エーテル・ドーム」) は、この時期まだ Sims のいた米国南部には普及していなかった。1920 年代後半になって、エジプトの Mahfouz は Sims の治療原則に従った膨大な数の全身麻酔下での膀胱陰瘻の治療経験を報告している。Sims 自身は、銀製ワイヤーを使用して行った動物実験 (Levert, 1829) や膀胱陰瘻の最初の手術成功例の報告 (Gosset, 1834) を見落としており、銀製ワイヤーを用いた先駆的功績の名誉は Sims ではなくこれらの人々に与えられるべきである。》

朝日新聞の記事では、〈黒人奴隷の女性患者に対して麻酔なしに人体実験的な手術を頻回に行った〉ことを殊更に強調し、人種差別、非人道的、女性蔑視の観点から銅像が撤去されるに至ったと記述している。しかしながら科学雑誌 Nature は、ニューヨーク市のこの処置に疑問を投げかけている。医学史上の過去の業績は、医師が当時おかれていた時代の状況を十分に考慮して客観的に判断すべきであり、現代の価値観や倫理観、人種差別や女性差別に対する反対運動などに基づいて政治的に評価すべきではないとしている。

発表では、種々の医学史関係書籍、婦人科手術書、ネット上での本テーマの記述についても言及する予定である。